

「ヘラクレスオオカブト (2)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

ヘラクレスの飼い主の男児は、大型の飼育ケースからカブトムシを出してくれた。角の先端をヒョイとつかんで、「はい、どうぞ」と目の前に差し出してくれた。こんなに簡単につかんで大丈夫なのか?しかしよく考えると、私も子どもの頃、多摩丘陵(平山城址公園)で採ったカブトムシも、角をつかんで移動させた記憶がある。



今は虫が苦手な私は、この大きさと迫力に一瞬たじろうたが、思い切って手のひらに載せてもらった。ずっしりと重い!と想像していたのだが、大きさの割には意外にも軽い。よく考えれば、ヘラクレスも昆虫なので、飛ぶはずである。飛ぶには、体は少しでも軽いほうが良い。それにしても、こんな巨体が飛んだら、さぞ壮観だろう。私は気絶するかも知れない。



よく観察すると、角は頭部から出ている長い角(頭角)と、下側の胸部から出ている短い角(胸角)の2本がある。これを使って「縄張り」への侵入者を撃退するにちがいない。



私はヘラクレスを手のひらに載せたまま、教室を一周することにした。「世界最大のカブトムシ」を目の前にして、子どもたちの反応は実にさまざまだった。大方歓声をあげて喜んでしたが、この班の女兒は、明らかに怖がって、よそ見をしていた。



教室を一周する数分の間にも、ヘラクレスは私のひらの上でゆっくり移動をしていた。やはり、少しでも高い方へ動きたいようで、今にも飛びたちそうだった。脚も長く、先端のかぎづめも鋭く、私の皮膚にがっししがみついている。「手のひらに虫が載っている」というよりは、「地球外生物が手のひらを侵略している」という、かつてない感覚だった。